

調査研究報告

秋元子爵家旧蔵「東海道絵巻」(一)

一 経緯

郵政歴史文化研究会第五分科会(近世)では、令和四年から調査準備を進め、翌五年六月から郵政博物館資料センターで収蔵する秋元子爵家旧蔵「東海道絵巻」(以下「東海道絵巻」と省略)写真の本格調査研究に着手した。

この絵巻は、今からちよūd百年前の大正一二年(一九二三)九月一日発災した、関東大震災で焼失している。したがって原資料を見ることは叶わない「幻の絵巻」である。

だが、焼失以前に郵政博物館の前身である逓信博物館により写真撮影が行われており、その紙焼きが当館に伝存する。

第五分科会では、逓信総合博物館時代から絵巻についての分析調査については懸案であった。江戸から京まで全行程が、三四・五×六二・〇センチメートルの台紙に貼り付けられた紙焼き写真が、中性紙箱三箱に収められ、合計七六図と長大であること。また、撮影に際して、絵巻の紙継ぎ部分の

重複撮影が意識されておらず、紙継ぎがわからないため何巻本で構成されているかも不明であったこと。さらに当時の撮影技術では、おそらく硝子乾板で撮影されたであろうが、撮影時のピントないし焼付けの状況が良好とはいえず、デジタル処理が施されてPC画面では紙焼きを直接見るよりも鮮明にはなったものの、詳細に描写が確認できないことが着手を躊躇させていた。

しかし、改めて絵巻の画像を確認すると、従来知られている他の「東海道絵巻」と描写や情報が異なることが見出され、新たな発見があるのではないかと調査をすすめることとした。

本報告は、江戸から徐々に歩を進めながら、京までの東海道の描かれた情報を明らかにして、考察を進めていく。経緯、概要、類本、制作年代の推定までを杉山、交通史と街道風俗的視点からの考察を山本、建築史からの考察を波多野の三名が分担執筆をする。

なお、「東海道絵巻」の調査研究は、本研究紀要発表をもって完結するものではなく、この絵巻の資料価値を明らかにし、それをもって製作当初の絵巻の復元複製を作成して、郵政博物館における展示公開を行い、広く

杉山 正司
山本 光正
波多野 純

多くの人々に鑑賞や利用をしてもらうことを最終目標としている。

二 概要

(一) 伝来

まず、「東海道絵巻」の概要について触れておく。概要について小項では、通信博物館の創設に関わった樋畑雪湖の著作などを元に当館の井上卓朗元館長の報告⁽¹⁾を参考に述べていこう。

樋畑雪湖は、著書⁽²⁾口絵に「日本橋」部分を掲載して、次のような解説をしている。

此圖は秋元子爵家舊蔵にして有名なりし東海道繪巻の中より抜萃せしものに係り、著者曾て通信博物館陳列用として複寫方を先代子爵に請い、撮影せしものによりたり。其當時子爵の談話によれば、秋元喬朝氏が老職時代の遺品なりと談られたるより元禄頃と著者が推定せるものなり。可惜關東大震災の爲めに亡びたりといふ。其寫眞は通信博物館に摸本は東京帝國大學史料編纂係に存す。

この記述から絵巻は、老中時代の秋元喬朝(喬知)の所蔵品であり、通信博物館では展示用に写真撮影したことがわかる。一方、現在の東京大学史料編纂所では、時期は不明ながら摸本が作成された。しかし、その後関東大震災で、原本は焼失したのである。

現在も東京大学史料編纂所では、江戸く品川間、酒匂川く小田原間の摸本を所蔵している⁽³⁾。さらに同史料編纂所発行の「史林聚芳」第六号に、原本子爵秋元喬朝氏所蔵として東海道絵巻「江戸本丸の図」が掲載されている。

なお、撮影時期については、通信博物館が開館した明治三五年(一九〇二)から先代の秋元興朝氏が亡くなる大正六年(一九一七)の間と推定する。

(二) 所蔵

この絵巻を所蔵していたとされる、秋元喬知についてみていきたい。一般には「喬朝」よりも「喬知」とされる。

喬知は、慶安二年(一六四九)下総佐倉藩主戸田忠昌の長男として生まれた。のち外祖父の甲斐谷村藩主秋元富朝には、男子がいなかったため養子となり、明暦三年(一六五七)九歳で遺領(一万八千石)を継ぐ。その後、奏者番、寺社奉行、若年寄を歴任し、元禄二年(一六九九)老中。正徳元年(一七一)川越城六万石を賜る。同四年(一七二四)、老中在任中に六六歳で死去している。喬知は、江戸城三の丸造営惣奉行、元禄大地震復旧普請や焼失した禁裏造営奉行などを担っている。

樋畑雪湖の著書によれば、喬知の老中時代の品との伝承を記すが、確証は無いものの、後に論証するが喬知所蔵品であることは信を置いてよいであろう。井上氏が、秋元家現当主に伺った話として、関東大震災で屋敷内にあった品は、絵巻を含めてすべて焼失したということである。したがって絵巻製作の経緯については、新たに史料が発見されない限り現時点では困難である。

(三) 法量

「史林聚芳」によれば、この絵巻は縦一尺一寸五分(三四・八四五センチメートル)との記述がある。紙焼き写真のサイズが、縦二一・〇センチメートル、横五八・〇センチメートルで、縦横比率は二対二・七六であるので、横は九六・二センチメートルの数字となる。単純に見返しなどを全く考慮せずに七六枚の絵をつなげると、七、三一センチメートル、つまり七三メートル超に及ぶ長大な絵巻となる。だが前述したとおり、紙継ぎなどの重複撮影がされていないこと、また上下も数ミリメートル程度カットされている⁽⁴⁾ので、正確な数字とは言いがたいが、約八十メートルの大作であることが想像される。

東京大学史料編纂所本の摸写法量は、三七・七×六三・一センチメートルである。ただし横に関しては江戸城から品川宿手前迄と、酒匂川から小

田原太閤御陣場迄の部分を一卷に仕立てられているので、横幅は参考にならない。調査で得た縦の法量三七・七センチメートルからは、「史林聚芳」記載の三四・八四五センチメートルと比較すると二・八五五センチメートルほど大きい。したがって原本が失われているため「史林聚芳」の数字が正しいと考えると、摸写は敷写しなど原寸摸写ではないことが推測される。

一方、「東海道絵巻」の郵政博と編纂所の、印画紙に焼き付けられた画像を比較すると、次のような相違がみられる。

トリミングの範囲が異なる。郵政博の画像については、以前より指摘していたが、画面の紙継ぎが見えるところ、見えないところがあり、重複して撮影、ないし焼付けがされていないため、左右の画面が切れている。

画像では、片側に紙継ぎの部分が見える箇所も随所に見られるが、当然ながら左右一方のみである。さらに墨書で場所を記した短冊状の金紙の貼紙が、半分以上切れていて判読できない箇所がある。一方、限られた画像ではあるが、編纂所の画像は、紙継ぎが見て取れる。

同様に天地についても、郵政博画像は、墨書の短冊状貼紙の上半分が途中で切れている箇所がある。勿論、墨書の場所は推定できるが、不自然である。かたや編纂所の画像は、郵政博でトリミングされて欠けている部分が見えている。

郵政博の画像は、編纂所の画像と比較してトリミングは均一ではないが、天地各概ね二・五ミリメートル程度、全体で四ミリメートル一センチメートル程度がカットされていると推測される。また左右も各一センチメートル程度、計二センチメートル程度詰められていると推定される。仮に左右長が二センチメートル長いとすると九八・二センチメートルとなり、画面だけで七四・六メートルの絵巻であったと推定されるのである。

郵政博物館では、写真は現状三箱に収められているが、単純に七六枚を三分割して、第一と第二が各二五枚、第三の箱が一枚多い二六枚に分けられているが、各箱の写真を一卷分とする二四メートルとなり、これまた通常の絵巻では、類例を見ない長さとなる。原資料がどこで分割されていたか、現時点では詳らかでは無い。

「五街道分間延絵図」のように、二〇〜三〇メートルの長大なものもあるが、卷子装の正本、いわゆる献上本は、鑑賞などを意識されたものではない。実務的に道中奉行所で日常的に絵図を利用することを目的とした郵政博物館所蔵の副本は、折本装にされていることから明らかである。

したがって実際に絵巻を取り扱う長さから考えると、一卷一〇メートル一五メートル前後が最適であり、現時点では六〜八巻で分割されて、構成されていると想定している。この巻の切れ目と巻数については、今後の調査のなかで、明らかにしていきたい。

三 類本

東海道絵巻については、類本が多数存在する。その諸本の分析等については、既に山本光正¹⁾や齋藤司²⁾により、詳細な研究がされている。

「東海道絵巻」についても触れられている山本の考察を見てみよう。

東海道絵巻について、三系統に分類し、①寛文一二年(一六七二)の「東海道再見記」系統、②元禄以前の「東海道駅路図」系統、③「東海道・中山道・甲州街道図屏風」(篠山市立歴史美術館蔵)の「街道図」系統の三系統に分類している。

「東海道絵巻」については、醍醐寺三宝院蔵「東海道五十三駅図鑑」との比較から、「その手法や風俗・衣装・建造物等に違いはみられるものの、描かれた内容とそのきらびやかなことには変わりはない。本絵図が「東海道五十三駅図鑑」に影響を受けているのかどうかは判断しがたいが、両者がその後の東海道の絵画に影響を与えたと推測される。」と指摘している。

すなわち一般の東海道絵巻は、絵画的要素を持ちながら地図としての機能がある程度備えたものであるが、「東海道絵巻」は地図的要素をほとんど与えずに、絵を鑑賞することを主とする目的として作成された街道絵画、すなわち③の系統に分類される。画面には、金の短冊状の貼紙があり、画面中に描かれた宿場・村名・橋・名所・社寺等の名称を記している。①、②のような解説的な記載は無い。例外的に橋の長さ、次の宿場への距離のみを記している程度である。しかし、それらの社寺や名所旧跡といった場所

第10紙	むさしさかみさかい やきもち坂 しなの坂 ゆみ町 戸塚より藤沢へ二里 たまなわ あふのむら じしう寺 八まん かいとりちや とびつか しほかまもり ゆぎやう寺 をくり よこ山 十人のとら とうしょうさか 御殿 藤さは 藤沢より平塚へ三里半 白はた明神 糸のしま こわた 大山みち うはしま 中嶋 ばにう 大山ふとう やはた ごんけん	武蔵相模境 焼餅坂 品濃坂 弓町 玉縄 大野村 親縁寺 富塚八幡宮 ？ 富塚 塩釜神社 遊行寺 小栗判官 横山大膳 十人の殿原 道場坂(遊行寺坂) 藤沢御殿 藤沢宿	ひらつか 平つかより大磯へ廿町 花水橋長サ四十三間 かうらい寺 とらか石 とらかいほりのあと 大いそ 大磯より小田原へ四里 鳴立さわ 小さいそ 長しやの道あと ばげちそう さかみのふちう さかみのしゆく 関本西金寺 心光寺村 まへ川はし あつまの明神 さかは 小田原より箱根へ三里廿八町 竹下山 小田八ら 太閤御ぢんは 天神 入りうた村 とうのさはゆ ゆもとのぢそう 宗雲寺 ふたこ山 はたのちや屋	平塚宿 花水橋 高麗寺(高来神社) 虎御石 虎が庵跡 大磯宿 鳴立沢 小磯 長者屋敷跡 化け地藏 相模の府中(国府) 相模宿 (最乗寺?) 心光寺 前川橋 東の明神 酒匂川		
第11紙	白旗明神(白旗神社) 江ノ島 小和田 大山道 姥島 中嶋 馬入 大山不動(大山寺) 八幡村 権現	第12紙	第13紙	第14紙	第15紙	第16紙

もとはこね
 かしの木
 ごんけん
 ぢそうたう
 さいのかはら
 はこね水うみ
 ほうてうとの城あと
 箱根より三島へ三里卅町
 御番所
 とうけ
 元箱根
 榎の木
 権現
 地藏堂
 賽の河原
 箱根湖(芦ノ湖)
 北条殿城跡
 御番所(箱根関所)
 箱根峠

この中で建造物や構造物など建立年代に注目する。絵巻が描かれた同時代に、存在しない建造物は当然描かれないはずである。ところが廃絶した建造物は、江戸城など明暦大火(明暦三年=一六五七)で焼失した後も、後代になっても江戸の象徴として描かれており、当時の人々の心象風景にもなつて絵画表現として描かれている。したがって、管見の限りではあるが、建立年代が江戸時代の比較的年代の下る構造物を中心に、併せて消滅した建造物もみていく。

江戸城 明暦三年(一六五七) 焼失
 常盤橋 寛永六年(一六二九) 命名
 呉服橋 寛永以前か
 一石橋 寛永以前か
 日本橋 慶長八年(一六〇三) 架橋?
 京橋 慶長八年(一六〇三) 架橋?
 芝間魔堂 貞享二年(一六八五) 増上寺塔頭宝珠院として開創
 芝大仏 寛永十三年(一六三五) 如来寺開創
 太子堂 明暦年間(一六五五〜五八) 高輪神社太子堂建立
 東海寺 寛永十五年(一六三八) 開創
 濟海寺 元和七年(一六二一) 開創

品川御殿 元禄十五年(一七〇二) 廃止
 六郷橋 貞享五年(一六八八) 流失後架橋されず
 神奈川御殿 明暦元年(一六五五) 廃止
 藤沢御殿 寛永十一年(一六三四) 明暦三年(一六五七) 廃止
 箱根関所 元和四年(一六一八) 設置

江戸・箱根間の年代の判明する構造物では、六郷橋が年代的には下限である。六郷橋は、貞享五年の流出以降、明治七年(一八七四)迄架橋されていない。しかし、六郷橋に関しては、流失後の元禄三年(一六九〇)刊行の「東海道分間絵図」に六郷橋が描かれている。このことについて、同書復刻解説の木下良氏は「以前の資料によつたことを示す。」としているが、山本氏は「人馬賃銭の改訂があつたためそれを削除するほどのだから、地図として正確な本図であればたとえ「東海道分間絵図」の原図にあたる「東海道絵図」に六郷橋があつてもこれを削除して当然であろう。その理由はやはり六郷に再び架橋されると考えていたか、空間認識としての江戸の出口である六郷の橋は、この当時まだ象徴的存在であることなどから削除しなかつたのではないだろうか。」^(註)とする。地図的な要素のある「東海道分間絵図」と絵画的な要素のある「東海道絵巻」とは単純に比較は出来ないが、後段で山本氏が指摘するように流失以降でもパターン化されて六郷橋が描かれており、また焼失した江戸城や廃止された御殿なども同様に象徴的に描かれていることから、六郷橋も下限の対象とするには躊躇する。同様に波多野氏も「存在する建築を描かないこともあれば、すでに失われた建築を描くこともある。「制作年代と景観年代は必ずしも一致せず、むしろ過去から制作年代までに蓄積された情報が混在する。同時に成立しない情景が、同じ画面に描かれることも珍しくない。」と同様に述べており制作年代比定は容易ではない。

次に着目したいのは、芝間魔堂(増上寺塔頭宝珠院)である。開創は、貞享二年(一六八五)とされ、少なくとも「東海道絵巻」はこれ以前に描くことは不可能であり、箱根までに描かれた建築物では、これが上限の年代である。あくまで仮にはあるが、六郷橋の流出前であるとすれば、「東

海道絵巻」の制作は貞享二〜五年とかなり絞られてくる。しかし、箱根以西の建築物等の成立年代を見ていかなければ、単純に判断することはできない。ここでは、貞享二年以降の制作ということに留めておきたい。

(二) 所行者行動来歴

本絵巻の所用と伝えられる秋元喬知の履歴^(註)から、制作の契機と時期を考えてみる。喬知は、戸田山城守忠昌の嫡男として生まれ、初め喬朝子の無かった外祖父であった谷村藩主の秋元富朝の養子となる。のち奏者番、寺社奉行、若年寄、元禄一二年(一六九九)十月に老中襲職、正徳四年(一七一四)八月、老中在職のまま死去している。

『諸家譜』に記された喬知の履歴の中で、「東海道絵巻」制作の契機として考えられる動きが一点みられる。宝永五年(一七〇八)三月一四日、禁裏造営奉行に命じられていることである。翌六年七月二日に將軍綱吉に暇乞いをして、同二十三日参内して中御門天皇に拝謁、八月二七日江戸に帰っている。『諸家譜』では、喬知前後数代の当主が、東海道や京都に赴くなど、当地に關係した記事はみられない。このことから喬知所用であったという秋元家の言い伝えは、首肯できるのではないだろうか。

そうであるとするれば、喬知の東海途中の記録として、制作されたと考えられ、実際にそのような例も残されている^(註)。造営奉行拜命時に、事前の準備として制作したともいえるが、これだけ大部の絵巻を制作に要する時間と手間を考えると難しいのではないだろうか。やはり帰府後に道中で見聞した名所、既に失われた江戸城や御殿の位置関係など考証を加えて制作させたのではないだろうか。すなわち山本氏が指摘するように「象徴的に描かれ」図中に挿入されたことを裏付けるものである。したがって宝永六年以降の十八世紀初めの制作と考えたい。

箱根以西の建築物等で、宝永六年(一七〇九)以降のものが見つかった場合、改めて制作年代について修正をし、再検討したい。

(以上、杉山)

五 絵巻の考察

秋元家旧蔵の「東海道絵巻」の経緯については杉山部会長が述べているので、ここでは「東海道絵巻」の検討について述べることにする。

秋元家旧蔵「東海道絵巻」(以下「東海道絵巻」と省略)の検討については、私自身検討をしなければと考えてはいたが、絵巻の分析・検討の方法論を模索するだけで無意識のうちに遠ざけていた。それは分析・検討の方法が定まらず、実際に検討を始めたら膨大な仕事量になるからである。逡巡している私に調査の開始を決断させてくれたのは杉山部会長である。杉山氏は今後の第五分科会(近世)の研究調査方針として「東海道絵巻」の検討を掲げた。私は杉山氏の発言・決意に背中を押されたように賛成してしまった。

調査研究方法については、以前東海道の文化史的な著書^(註)を書いた山本が、とにかく絵巻を見ながら話しをして様子を見ようということになった。

第一回の検討会は六月三日に行われたが、検討結果の内容は一貫性のあるものではない。しかし概報として記録に残し後日の検討素材とすることになった。

(一) 絵巻の特徴

第一回の検討で得られた結果を基に、最初に本絵巻の特徴について記しておこう。現段階における検討結果であるためその後修正、訂正が行われるであろうことを断っておく。なお、毎回の検討結果や事項についても修正・否定されることもある。とにかく間違えを恐れずに検討してみようということである。

○本絵巻の最大の特徴は人物・建造物等々実に丁寧に描いていることである。絵巻のどの箇所を切り取っても独立した絵画として成立する。それだけではなく人物だけ絵巻から取り出しても独立した絵画となってしまう。

試みに郵政博物館の菊池学芸員に人物像の模写をもらった【図1】。



【図1】

上記の人物模写は実際より拡大したものであるが、拡大しても違和感がない程である。衣装の文様も明瞭で、そうした方面の研究にも益するところ大であろう。恐らく絵巻に描かれた人物だけを摘出すれば、近世の旅を「絵」で語る事ができる。

○絵巻は基本的には右から左に進む。本絵巻も右端が江戸、左端が京で、右から左に進む。そのため街道沿いの家の右側は正面を描くことができる。これに対して左側の家は正面を描くことが出来ず、裏側を描かざるを得ないので、裏側の描写はあまり

丁寧には描かれないのが一般的である。これに対し本絵巻は裏側の描写も正面と同様に縁側に座る人物、話し込む人物が描かれている。

○特筆すべきことは、將軍休泊用の御殿である。將軍が移動する場合、休泊は街道等に設けられた施設に休泊するが、この施設は「御殿」「御茶屋御殿」などと呼ばれ、御殿は宿泊、御茶屋御殿は休憩施設ともいわれる。多くの東海道絵巻には御殿が描かれるが、街道沿いに設けられた御殿の一部を描くだけで、その建造物も形式的である。

本絵巻には東海道に設けられた御殿全てが描かれているようである。しかも建物は形式化したものではなく、それぞれ異なっている。現存する建物を見ながら描いたと思われる程である。これもまた研究課題である。

○山本はこれまで多くの東海道絵巻を見てきたが、これまで本絵巻同様の絵巻を見たことはない。形式的に若干類似しているのは国立歴史民俗博物館蔵の「東海道五十三駅画卷」であるが、描写その他本絵巻と比べようも

ない。

以上が現段階における本絵巻の特徴である。

(二) 江戸より品川宿入口辺りまで

① 江戸城から京橋手前まで
情報量の多い本絵巻は多方面からの分析ができる。本研究会は主に交通史・旅行史、及び情報の立場からの分析を行う。しかし絵巻の面白さから、しばしば横道にそれてしまう。

絵巻は江戸城から始まる。冒頭には「江戸御本丸」の貼紙がある。現存する東海道絵巻のほとんどは江戸城を描くがこれ程具体的に描いた絵巻は見たことはない。勿論実景かどうかは別である。天守閣が描かれているが、江戸城天守閣は明暦の大火で焼失している【図2】。

興味深いのは江戸城中にこれから旅に出る様子が描かれていないことである。描かれているのは地方から江戸に到着、或は大名が江戸藩邸から江戸城に到着したとみられる様子である。幾つかの門が描かれているが門の推定は差し控える【図3】。

江戸城中を出て常盤橋を渡る。橋の下の外濠には船が行きかう。二艘共



【図2】



【図3】

に物資を積んでいる。神田橋御門方面に向かう船は船頭一人で荷は藁筵でくるまれ、縄で縛ってある。

呉服橋方面へ向かう船は大型の船で少なくとも二人の乗組員がいる。船の前方には俵らしきもの、船尾には魚が積まれている。外濠が物資輸送に利用されている様子が分かる。

画面上方には呉服橋・壱石橋が描かれ、上端には鍛冶橋とみられる橋が描かれている。「ときは橋」「御ふく橋」そして「壱石橋」が描かれているが、「壱石橋」は実際には常盤橋と呉服橋の間を流れる日本橋川入口に架かる橋である。日本橋川を少し下れば諸街道の起点日本橋である。

日本橋川には二艘の船が行き交う。左岸寄りの船には荷が吠に詰められている。川を下る船には俵と魚が積み込まれている。日本橋川左岸には当時魚河岸があったはずだが描かれていないようである。

日本橋を渡ると右手には高札場が描かれている。左側には二名の武士と従者が腰をかかめているようにみえる【図4】。その背後の家の屋根には防火用と思われる桶が置いてある【図5】。

日本橋手前、街道左側の家の屋根上に櫓が描かれている【図6】。京橋手前も同様である【図7】。これは橋を見張るためのものなのだろうか。



【図4】



【図5】



【図6】



【図7】



【図9】



【図8】

② 京橋から品川宿入口付近まで

筵にくるんだ大きな荷を背負った人が橋を渡ろうとしている。橋の中央には武士ともう一人。京側（西側）からは刀を一本差した男らがやって来る。橋の下には荷を運ぶ船が京橋川を下る。荷は藁包み、舳先には魚。魚は甕のようなものに入っているようにみえる。

この辺りで改めて気が付いたが、非常に多くの人物が描かれている。このことについては特徴でも述べたが、一人ひとりを切り取ってもそれだけで独立した絵になるほど丁寧に描いている。

京橋を渡った左側の家の上がり框に腰かけた女が棒手振りの男と話している。両方の籠に魚が入っている【図8】。

少し進むと画面上に「神明」とある。芝神明である。この辺りは十字路になっており、左角の家の上には櫓。太鼓らしきものが描かれている。防火用の桶も屋根上にある【図9】。

この辺りに限らず街道沿いの家の中まで描かれているが、どのような商売をしていたのか、品物は何かはよく分からない。絵巻の筆者が意識して商売の具体的様相を描かなかったのだろうか。右手には神明の鳥居があり、これを潜ると神楽殿とみられる建物が。相変わらず多くの人物が描かれ、街



【図10】



【図11】



【図12】



【図13】

道沿いの家の中の人々の様子も生き生きと描かれている【図10】。

画面上部は神明から増上寺に移行する。増上寺については山門が描かれているだけで、伽藍は描かれていない。

やがて金杉橋に差し掛かる。橋の手前には三味線を弾く男と歌っているらしい男。門付けの芸人か。橋の左側には座り込んだ男、この男としゃがみ込んで話をする男。刀を二本差している【図11】。

増上寺を過ぎると画面上部には暖簾の掛かった店と、往来する人物が三名。適当に描いたとは考えられない。

次の画面上部は「八まん」である。西久保八幡で『東海道名所図会』には「三田八幡」とある。

東海道からは八幡への道が右に分岐するが、その辺りには大きな魚を籠に積んだ棒手振りが行く。八幡入口には細長い建物があるが、一見八幡関連の建物のようにも見える。

少し進むと「西のくほ道」と書かれている。ここが本来の西久保八幡への道なのか。

画面上部の「ゑんまとう」（閻魔堂）は増上寺塔頭の三縁山宝珠院で、弁財天と二メートルもある木彫閻魔大王像が祀られている。

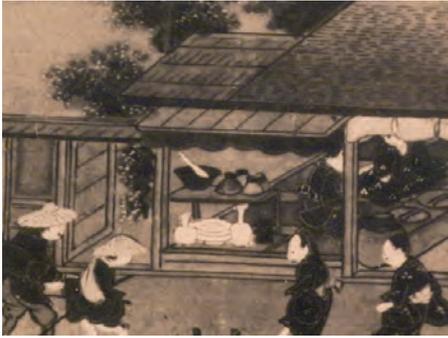
閻魔堂の左側の「大仏」は高輪如来寺の五智如来で、芝大仏と呼ばれたようである。明治に至り品川区の西大井へ移転。

東海道に戻ろう。「西のくほ道」と書かれた辺りに江戸方面に向かう旅人とみられる一行が描かれている。馬上には笠を被り日の丸の扇子を持つ女性。馬には鞍というより俵のようなものを置きその上に布または布団が引いてあり、女はその上に座しているようである。いわゆる軽尻馬だろう。口取りの馬子が付き添い、その後ろからは従者が二名荷を担いでいる【図12】。

東海道は高輪に入る。相変わらず街道の両側には家並が続くが、高輪如来寺辺りに入った途端に旅人の描写が多くなる。必ずということではないが、旅人は笠を被っている【図13】。

高輪の家並が途切れる辺りの右側の店の台の上には、播鉢と播り粉木、またはお玉の入ったすり鉢状の容器やどんぶりのようなものが描かれている【図14】。鶴首の容器が描かれているが、これまでの店には描かれていなかった（見落としがあるかもしれないが）。この容器は酒を入れる徳利のようである。これ以降店には徳利が置いてある店が描かれるようになる。

その向かい側の家の裏側には明かり障子が、そして掃除をする男、さら



【図14】



【図15】



【図16】



【図17】



【図18】

に塵取りまで描かれている【図15】。
なお、明かり障子についてはここで気が付いたが、江戸から高輪までの家の裏側には明かり障子が描かれている。

これより東海道は金雲に仕切られ、品川宿に入る。

(三) 品川宿より川崎宿入口まで

① 品川宿

金雲を抜ければ品川宿である。品川宿の描写は圧巻である。直線状の東海道に何軒もの店が並び、その繁栄振りが伝わってくる。東海道から海側に延びる脇道は斜めに描かれている。そのため店の正面を描いている【図16】。

相変らず何を扱う店かは分からないが、茶釜あるいはカマドに据えられた鉄鍋のようなものや、店に並べられた魚、飲食用の器類等々鮮明に描かれている【図17】。

宿内は詳細に描いているものの、大きな疑問がある。品川宿は旅人の宿泊で繁栄したというより遊郭として多くの人を集めた。確か遊郭・遊女と呼ばれるのは厳密には吉原だけであり、品川はあくまでも宿場で、遊女で

はなく飯盛女であったが、品川は遊郭と化し遊女と呼ばれた。
ところが本絵巻にはその様子を示す描写が見当たらないのである。着飾った女性も少し描かれてはいるが。

妙国寺参道の手前には二輛の牛車が描かれている。ここでは江戸における牛車の来歴については省略するが、江戸の牛車は広重の「名所江戸百景」や「東都名所」にも描かれている。本絵巻の牛車はそれよりもかなり以前の様子であり、荷は四角い箱に入っているようにみえる。牛車の画像資料として貴重なものだろう【図18】。

牛車は西に向かうが、牛車の先には馬に乗った男と従者が江戸方面に向かう。馬は駄賃馬で、前述の女同様軽尻馬のようである【図19】。

牛車の辺りから画面下に海が描かれる。三艘の船には魚が積み込まれている。海岸は石垣である。石垣は明暦元年（一六五五）朝鮮来聘使来日に際して造成されたという。この石垣は以降江戸湾のランドマークになり、海から江戸を望む絵画には必ず石垣が描かれるようになっていく【図20】。

妙国寺参道を過ぎると、西側から江戸方面に向かう旅人の一行。挟み箱を担いだ従者と武士が先頭に、その後から駕籠に乗った主人と従者が一人。駕籠は山駕籠のようである。その辺りの街道右側の店の一軒には大きな籠



【図20】



【図19】



【図22】



【図21】



【図23】

のようなものが置いてある。画像がもう少し鮮明であれば高い物を判別することができるのだが【図21】。画面上部に「御ちや屋」とある。將軍休泊用の御殿である。建物は実際の建造物を見て描いたように描かれている。これより「御殿」はすべて描かれているが、これは本絵巻作成意図を表しているのだろうか【図22】。御茶屋御殿下辺りの海上には船が多く描かれている。四艘は帆掛け船で江戸方面に向かっていている。船は大小あるが、何れも物資輸送船である。幔幕を巡らした屋形船も江戸方面に向かっていている。船内はまる見えで、酒を酌み交わしている。後ろの船は漁船で、漁獲物を陸揚げしている最中のようにある【図23】。



【図25】



【図24】

② 鈴の森神社から川崎宿入口まで
品川宿も御茶屋御殿の辺りで終わるようである。橋を渡り鈴の森神社参道を右に見るが、この橋が品川宿と大井村の境だろうか。
街道沿いの店は内部までよく描かれているため、検討しなくなってしまう。これではキリがないので特別な描写のある時だけ取り上げることにする。
この辺りには刑場が設けられていた。刑場は慶長二〇年(一六一五)高輪の木戸付近に設けられたが、慶安四年(一六五二)鈴ヶ森に移転。本絵巻作成時点では刑場が存在したであろうが描かれていない。近世に作成された東海道図には鈴ヶ森刑場は描かれていないようである。刑場は不浄な場であり、絵図を見て楽しむ人にとっては楽しみをそがれるものであったろう。
品川宿出口辺りからは街道を往来する人物のほとんどは旅人である。旅人を詳細に分析するだけでも大きな成果を得ることができるだろう。鈴の森神社辺りから大木村辺りにかけて、どういう訳か飛脚が四名描かれている。東側から西側に向かってそれぞれの飛脚をみてみよう。
最初の飛脚は江戸方面に向かっていている。棒のようなものに書状を挟んで担ぎ、頭には鉢巻をしている。これは他の飛脚も同様である。最初の飛脚はカルサン(野袴)をはき身なりもよく、刀を一本差している【図24】。
二人目は西に向かう飛脚で、身なりも粗末で刀は差していない【図25】。三人目は江戸方面に向かう飛脚で出立ち最初の飛脚とほぼ同じである。この飛脚の前に鉢巻を締め飛脚を振り返る男がいる。この男も刀を差している。走る飛脚の露払い又は交代要員であろうか【図26】。
四人目も江戸方面に向かっている。身なりは最初の飛脚とほぼ同じだが、笠を被り刀は差していない。この飛脚の前にも鉢巻をし、刀を差した男が走っている【図27】。
東海道は玉川(多摩川・六郷川)を越える。六郷川には近世前期には橋が架けられていたが、洪水で度々流失。その度に架け替えられたようだが、貞享四年



【図27】



【図26】



【図28】

六 絵巻に描かれた江戸の町家

(一) 絵巻の魅力と絵画史料検討の前提要件

① 『東海道絵巻』の魅力

江戸町人地の都市景観は、明暦三年（一六五七）の明暦大火を境に大きく変わったとされる。大火前の都市景観を描いた絵画史料として、出光美術館蔵『江戸名所図屏風』（以下、出光本）と国立歴史民俗博物館蔵『江戸図屏風』（歴博本）、さらに個人蔵『江戸天下祭図屏風』（天下祭図）が知られている。それぞれの景観年代は、出光本が寛永初期、歴博本と天下祭図が明暦大火直前と考えているが、諸説あり確定的ではない。なお、天下祭図は江戸城と周辺の大名屋敷が主で町家部分はわずかであるため、今回の検討からは除外する。

（一六五八）に洪水で流出すると近世には再び架橋されることなく渡船になった。橋が流出してもパターン化した東海道絵巻のほとんどは六郷の橋を描いている。橋を渡れば川崎宿である【図28】。
（以上、山本）

では、明暦大火によって都市景観は本当に大きく変わったのであろうか。制度的には、三階建ての禁止、瓦葺の禁止、庇下通り道の設定など景観を変える要素がいくつかあるが、大火後、一七世紀後半から一八世紀初めの都市景観を分析できる適切な絵画史料は少なく、詳細な検討は不十分である。新出の秋元家旧蔵『東海道絵巻』は、第一印象としては、上記二屏風（出光本・歴博本）より古い形式の町家を描いていると思われる。さらに、町家に関する今までの理解とは異なる情報が数多く含まれており、詳細な検討が必要である。本稿はその第一歩としての概報である。なお、江戸城・武家屋敷および寺社建築の検討は別稿とする。また、橋梁・高札場・町木戸などの都市施設も都市構造の変遷を考える上で重要な要素であるが、稿を改めたい。

② 絵画史料検討の前提要件

絵画史料を検討する場合、何時の景観を描いているか（景観年代）、何時制作されたか（制作年代）、誰のために（注文主・享受者）、誰が（絵師）、何を目的（用途）に、などの諸点を明らかにする必要がある。絵画史料の分析視角として、私は以下のような考え方を前提としている。

⑦ 都市図屏風や街道絵巻など、都市・集落景観を描いた絵画は、蓄積された粉本を取捨選択して構成されるものである。存在する建築を描かないこともあれば、すでに失われた建築を描くこともある。例えば、江戸城天守は、明暦大火で失われ以後再建されないが、江戸城を示すアイコンとして幕末まで描き継がれる。

④ 制作年代と景観年代は必ずしも一致せず、むしろ過去から制作年代までに蓄積された情報が混在する。同時に成立しない情景が、同じ画面に描かれることも珍しくない。

⑤ 絵師は注文主や享受者の要望、時代の風潮に沿って、目的・用途を念頭に置いて描くものであり、絵画によって何を伝えようとしたかを見極めることにより、史料的価値が明確になる。

つまり本絵巻においても、多様な景観年代を示す建築要素が含まれているが、それを否定的に捉えず分析を試みる。

(二) 京町家の継承と江戸の独自性

初期江戸の町家は京町家をモデルに建築されたとされる。近世初頭の京町家を知る絵画史料としては、一六世紀に制作された歴博甲本『洛中洛外図屏風』、上杉本『洛中洛外図屏風』を先駆とし、一七世紀初頭元和年間以降、大量に制作された。現存百数十本とされ、江戸の絵画史料とは比較にならない数が残る。

一七世紀初頭の京町家は、切妻屋根が連続し、各戸の端部には卯建が載る。店先は格子で仕切られ、片側に奥への通路である通り庭が設けられる。商は通り庭に入ったところになされる。

① 平屋・厨子二階・二階屋

出光本に描かれた街道筋の町家は、厨子二階と呼ばれる立ちの低い二階屋を含めれば、二階屋が多い。歴博本では、ほとんどが二階屋で、平屋は場末に限られる。いっぽう、本絵巻では、日本橋の北詰および南詰と京橋北詰に厨子二階が見られるものの、それ以外の町家は平屋である。つまり、本絵巻はきわめて古い状況を示している可能性がある。

京町家では、一六世紀の屏風絵に二階屋が描かれることはほとんどなく、一七世紀になると二階屋が一般化する。

② 屋根葺材

近世初頭に使われた屋根葺材には、(本)瓦、銅瓦、檜皮(ひわだ)、板(柿・木賊・長板など)、板葺石置き、茅などがある。

出光本では、板葺と瓦葺が混在し、場末に行くと板葺石置きが増加する。歴博本では瓦葺が増加している。ところが本絵巻では、瓦葺は土蔵以外にはまったく見られず、各種板葺、板葺石置きに限られる。

江戸における瓦葺は慶長年間にはじまったとされるが(「本町二丁目半瓦の弥次平」『見聞集』)、普及には時間が掛かった。延焼防止策として有効な瓦葺であるが、明暦大火後に禁止される。「瓦屋のこと。国持大名といふともつくるべからず。但倉廩はくるしからずと令せらる」(『嚴有院殿

後実記』明暦三年二月晦日条)とある。防火の見地からすると、むしろ逆行する施策である。この対策として、藁・茅・柿など燃えやすい屋根の上を土・蛸殻・芝などで覆い飛び火を防ぐ触が度々出されているが、弥縫策にすぎない。その後、享保改革期に、棧瓦の開発・普及と相まって、瓦葺が推進されるようになる。

本絵巻において町家の瓦葺が描かれていない要因はどこにあるのか。景観年代が古いのか、あえて描かない理由があるのか、慎重な検討が必要である。

京町家の基本構成として、屋根は板葺で石置き屋根も見られる。瓦葺は少ない。

③ 卯建

卯建(うだつ・税・宇立)は、切妻屋根の妻側端部を屋根より高く持ち上げ小屋根を葺いたものである。形の類似性から防火壁と考えられたが、茅や板など可燃材料で作られた例が多く、当初の卯建に防火壁としての役割はなかった。伊藤鄭爾は、長屋建ての店舗に店を構える商人が自立の証しとして卯建を上げたとの見解を提示している(『中世住居史』)。卯建は、一七世紀初頭の京町家には一般的に見られ、明暦大火前の江戸の町家にも普及していた。その後、時期は不明であるが江戸の町家からは卯建が消えたとされ、江戸時代後期まで卯建が残った大伝馬町の町並みは、特異な事例として知られた。



【図29】 八幡門前の町家 3棟にうだつが載る

いっぽう、本絵巻では、芝神明門前一棟、増上寺門前一棟、西のくほ道(八幡門前)三棟【図29】に限られる。京町家から卯建が伝えられる初期段階とも江戸の町家から卯建が消えた後の段階とも考えられるが、



【図30】 日本橋北詰西側の町家 庇柱が建ち 庇下通り道が作られている。数種類の暖簾が吊されている。

屋根葺材との関連からすると前者と考えたい。

④ 庇下通り道

京町家と異なる江戸の町家の特徴に、通りに面した一階の庇が、半間から一間前に出る形式がある。京町家では一階と二階の柱が揃っているのに対して、一階の庇が道を占拠して造られた。明暦大火後、半間の庇を柱のない釣庇に限るいっぽう、表通りである本町通と通町通りに限っては、道路を占拠した一間の庇が認められた。「庇下通り道」である。法令上は、「庇下通り道」である。法令上は、

道幅確保を前提に、道路から半間、屋敷地から半間を出し合って、公共のアーケードを造ることになっているが、実情は、一間幅すべてが道路上に造られた。この「庇下通り道」が現状追認であることは、大火以前の状況から推察できる。「庇下通り道」は、出光本では日本橋北詰のみに確認でき、歴博本では広範囲に拡大している。

本絵巻では、「庇下通り道」は日本橋北詰に限られ【図30】、出光本と同様の傾向を示すことから、「庇下通り道」の初期段階と捉えられる。さらに出光本では、長屋建ての表店に数種類の暖簾を下ろし、いくつかの店舗が分割して商をしていたことが分かる。本絵巻にも同様の営業形態がみられ、出光本との近似性が感じられる。

(三) 櫓建築の特異性

本絵巻には、町家の屋根上に載る櫓形式の建築が五ヶ所描かれている。

- ㉗ 日本橋北詰東角、㉘ 日本橋南詰西角、㉙ 京橋北詰東側、㉚ 芝神明交差点北東角、㉛ 品川宿西側【図31】。



【図31】 5ヶ所の櫓

いずれも屋根は切妻あるいは入母屋の柿葺で、主屋の屋根に接する部分は袴腰の板壁か土壁、その上の人が乗る部分は吹き放ちである。内部には人物がおり(㉗は不明)、㉙㉚㉛では太鼓が置かれ、㉘では太鼓と鉦が釣られている。

本絵巻に描かれた五棟の櫓形式の建物は、出光本・歴博本には類例がなく、その成立過程から検討する必要がある。以下に可能性を提示するが、

時打ち櫓の可能性が高い。もしそうであるなら、今まで知られていない建築形式である。

① 三階櫓の前段階

初期の江戸には、表通りの交叉点に面して建つ三階櫓と呼ばれる城郭風の建築があった。京都とは異なる武都江戸の独自性の萌芽である。出光本では数棟に限られるが、歴博本では神田筋違橋から日本橋を経て新橋に至る通町通りに一四棟描かれ、芝御成橋の袂にも二棟ある。その成立要因として、角屋敷の者と言われる有力町人が武士である自らの出自を誇示した、外国使節や参勤交代の大名に対して江戸の権威や優越性を示すために幕府が支援をして建設させた、などが考えられる。監視、防衛拠点など具体的な機能は不明である。人物が描かれた事例もない。三階建は、慶安二年(一六四九)の町触により禁止され、明暦大火で焼失後は姿を消したとされる。

本絵巻に描かれた櫓は、④を除いて、ほぼ交叉点に面して建つことから、三階櫓の前段階の可能性がある。しかし、瓦葺、城郭風白漆喰塗りの三階櫓と、本絵巻に描かれた望楼風の櫓では建築形式が違いすぎ、連続性は感じられない。とすれば、本絵巻は出光本以前、三階櫓成立以前の状況を示していることになる。

② 火の見櫓

江戸の消防制度は、大名火消、定火消、町火消と順次整備されてきた。出火を発見するための火の見櫓も享保改革期に整備が進むが、それ以前にも大名藩邸や定火消の役宅に建設されてきた。大名藩邸の屋根上に建設された火の見櫓は、本絵巻の櫓と極めて似た建築である。しかし、同形式の櫓が町家の上に建設された記録は未見である。町家の火の見には、独立して広場などに建つ大規模な火の見櫓と、自身番屋の屋根上に建てられた梓火の見がある。元禄九年(一六九六)出火の見張りとして冬期に「屋根番」を置くことが定められ、同十三年には家主居宅の上に櫓を設置し年番によって移動することが定められた。この櫓は、本絵巻に描かれた櫓と近い

形式でありそうだが、年代的な検討は不十分である。

③ 時打ち櫓

登城時刻などを知る方法として、江戸城内で太鼓を打っていた。その後、寛永三年(一六二六)に時の鐘役辻源七が本石町三丁目土地を与えられ、鐘楼を設け鐘で時刻を知らせるようになった。

それ以前、町場でも太鼓で時刻を知らせていたか否かは、今後検討する予定であるが、本絵巻の櫓に太鼓が設置されていることからすると、時打ち櫓の可能性はある。治安維持のための監視の役割もあったのかもしれない。

(四) 『東海道絵巻』の新規性

本絵巻には、二階屋が少ない、瓦葺が土蔵以外に見られない、卯建がわずかしかない、庇下通り道が日本橋北詰にしか見られない、など出光本より古い形式の町家が描かれている。さらに、町家の屋根上に載る櫓は、これまで知られていない建築形式である。もし描かれた町家形式が、ある時期の景観の投影であるとすると、慶長から元和の情景を描いていることになる。しかし、幕末の写真を見ると大名屋敷の屋根上にきわめて近似した形式の櫓が写っている。火の見櫓であろう。つまり、限られた情報をもとに伝承化された櫓を復原して描くなど、絵師の創作であることを念頭に置いた検討は今後必要となるであろう。いずれにしろ、新規性の高い情報であることは間違いない。

(以上、波多野)

付記

今回、郵政博物館資料センターが収蔵する秋元子爵家旧蔵「東海道絵巻」について、郵政歴史文化研究会第五分科会として、波多野純氏の協力を得て、第一回目の調査研究報告をまとめることができた。

冒頭で述べたとおり「東海道絵巻」の調査研究は、本研究紀要掲載をもって完結するものではない。この絵巻の資料価値を明らかにし、当初の「東

海道絵巻」の復元複製を作成して、当館で展示公開を行って、多くの人々に鑑賞や利用をしてもらうことを最終目標としている。
本報告により、新たな情報が寄せられて「東海道絵巻」の研究が進むことを願っている。

(i) 井上卓朗「秋元子爵家旧蔵 東海道絵巻」『東海道く知られざる郵便創業の道』所収 月刊「たんぶるぼすと」増刊第五十八号 (株) 鳴美 平成二十四年

(ii) 『江戸時代の交通文化』 刀江書院 昭和六年

(iii) 郵政博物館菊池牧子学芸員の調査による。東京大学史料編纂所には、摸本一卷と写真資料十二点が所蔵されている。摸本原本の閲覧は認められないためデジタル画像(模写「波」一九一)で確認した。品川から、その間が飛んで酒匂川となっており、一巻に仕立てられている。写真資料は、十二枚の紙焼き写真を所蔵している。内訳は①「大名行列清見湯通行之図」(台紙付写真一五五・二二九)、②「小田原城之図」(同一六七・一三三)、③「富士川之図」(同一六七・一三三)、④「大井川之図」(同一六七・一三三)、⑤「江戸日本橋之図」(同一六七・二三三)、⑥「江戸京橋之図」(同一六七・二三三)、⑦「箱根関所之図」(同一六七・二三三)、⑧「荒井関所之図」(同一六七・二三三)、⑨「京都二条城之図」(同一六七・二三三)、⑩「掛川駅ヨリ袋井迄之図」(同一六七・三〇一)、⑪「岡崎城之図」(同一六七・三〇一)、⑫「熱田ヨリ桑名関所迄之図」(同一六七・三〇一)、⑬「三〇二九)。郵政博物館本とはトリミングが異なり、天地は約一センチメートル程度広く撮影されているもの、左右は描かれた主要情報の欠落が認められない程度に2〜5ミリメートル程度切り詰められている。
例として現状第十紙の貼紙は、文字冒頭が欠けており、数ミリメートル程度上下に本紙が伸びているとみられる。

(iv) 山本光正『街道絵図の成立と展開』臨川書店 平成十八年

(v) 斎藤司「東海道図屏風・東海道絵巻の基礎的研究」(一)〜(三)『横浜市歴史博物館調査報告』第三〇五号 横浜市歴史博物館 平成十九〜二十年 註v 五八頁

(vi) 『寛政重修諸家譜』(巻第九百五十八「秋元」)第十五卷 続群書類従完成会 昭和四十一年

(vii) 例として天保一二年(一八四一)に一三代將軍家定の御台所となった、前関白鷹司政熙の娘有君の下向絵巻「御下向絵巻」(群馬県立歴史博物館蔵)の箱書には、姫の求めにより供奉人数とお好みの景色を描くことを求められた旨が記される。依頼主が、旅の記念や記録、つまり当時のアルバムとして描かせている。思い出を手元に置いて楽しむという、容易に旅に出ることができない身分ならではのことといえるだろう。また、同じ有君の下

(x) 向を描いた「有君之御方御下向御行列之図」(国立歴史民俗博物館蔵)は、警護にあたった大目付石川忠房が描かせている。「和宮江戸下向絵巻」(江戸東京博物館蔵)も行列の先駆を務めた関行篤が榮譽を子孫に伝えるために描かせるなど、同様に後世への記録としての意味も見いだせる。
註v

(すぎやま まさし 埼玉県立文書館元館長、
やまもと みつまさ 交通史学会元会長、
はたの じゅん 日本工業大学名誉教授)



「東海道絵巻」(第1紙~第7紙)

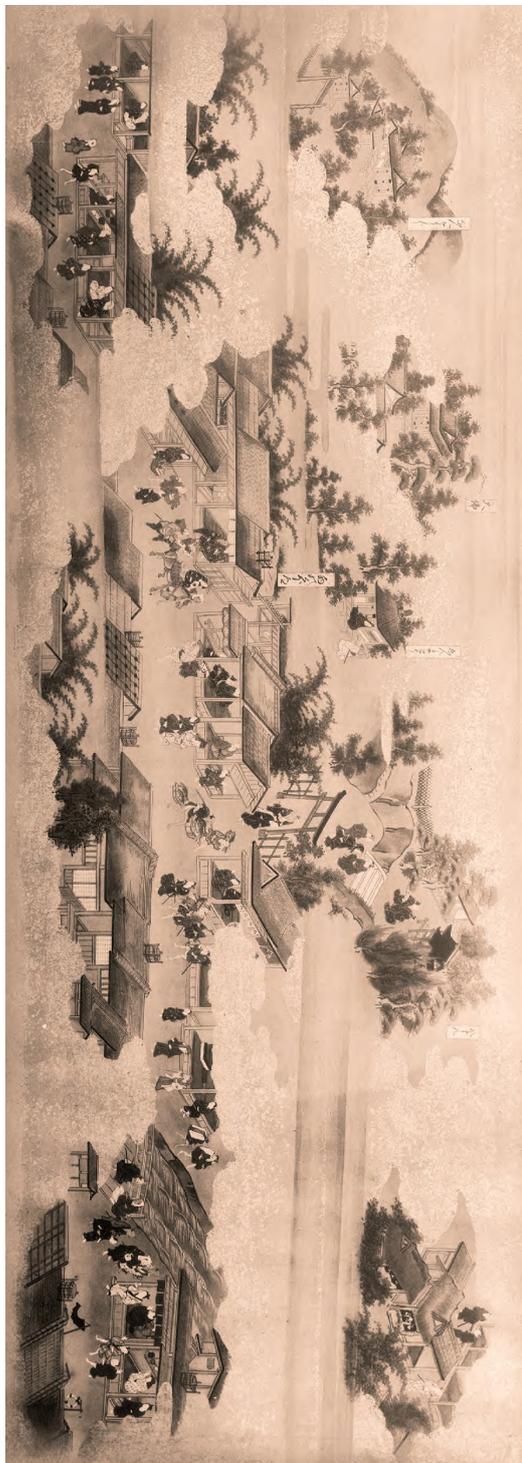
第1紙 江戸城本丸



第2紙 日本橋



第3紙 増上寺



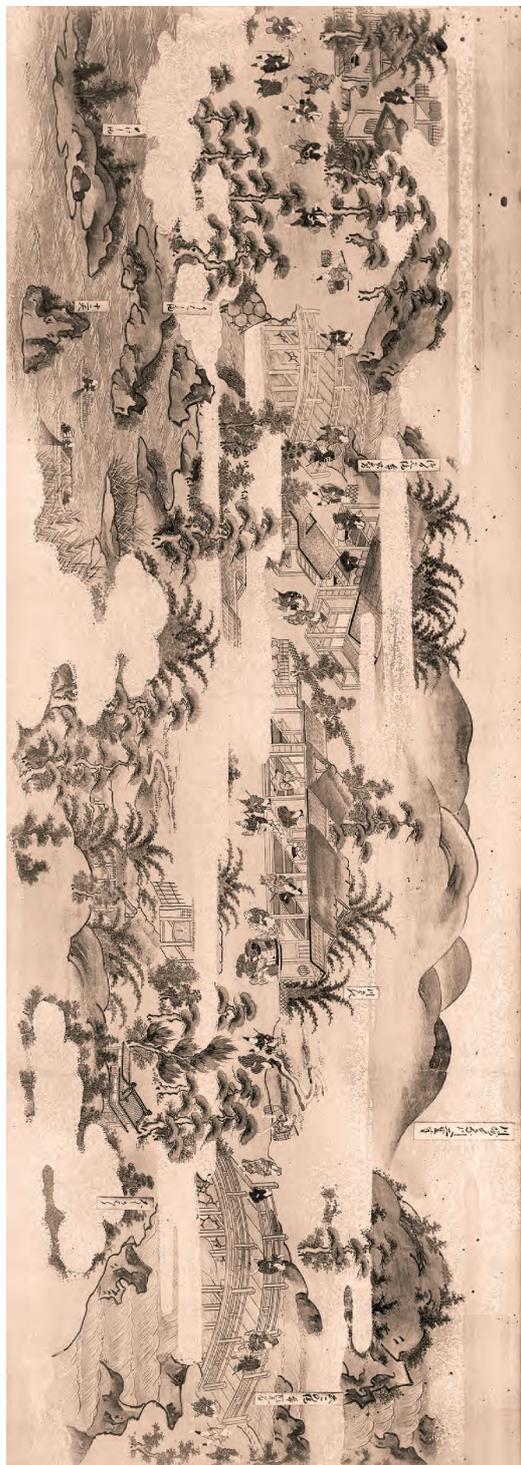
第4紙 芝間魔堂



第6紙 御殿山



第5紙 品川宿



第7紙 川崎宿
※各紙名称は画中の主要箇所を便宜上つけたもので正式なものではない。